

歌った後に食べる油でこつてり濁っている不健康なラーメンは最高だ。濃厚という一言では語れない味わいが喉を潤す。どんなにシャウトしても、何時間歌っても、酒を飲んでも、最後にラーメンを食べてしまえば、数時間後にはなかったことになる。水？ そんなのは腹の足しにもならねえ。

そんなことを考えながらひたすらラーメンを爆速で啜っている様子をやや引いた目で見てくる二人。

「相変わらずよね。こいつの食べ方」

そういう追川天だつて相も変わらずちんたらと少量をつまんで食べる。足の細さ以外にはたいして女子っぽくないくせに、誰にアピールしてんだか。

「ダメだ、聞いてないわ」

「大丈夫だよ。十分待たずに食べ切っちゃうから」

「今日は大事な話があるついでに」
俯瞰しながらデカイ口で頬張る榊葉晴も大概食べるのが早いのだが。こいつとサシで食べに行く待ち時間より短い時間で食い終わることもしばしばだし。

結局、俺と晴が同じくらいのタイミングで食べ終わる。お腹が少し張っているけど、それ以上に油としようゆとニンニクがいい感じに混じり合って口全体に残っている。ああ、やっぱりうまいや。これがなくちゃボーカルはやってられねえ。

天が食べ終わるのをスマホ片手に待っている。SNSには膨大な数のインディーズバンドたちがそれぞれの形でアピール合戦を繰り広げている。俺ら三人もその中の一つなんだが。

俺たち「The TRIPLe」の活動ももうすぐで五年になる。インディーズバンドの中ではそれなりに知名度も出てきたぐらいだ。対バンで他のバンドと一緒にライブをすると、まあまあ確率で相手に知ってもらっているぐらいには。小さいライブハウスなら満席にできるくらいには。ああ、ということは天のおちよぼ口を見るのもかれこれ五年も続けているのか。

「そういえば、大事な話って何？」

晴が思い出したように天に尋ねると、天はゆっくり箸を置いてこちらを見た。

「実はさ、結婚することにしたの」

「マジ？」

結婚という言葉聞いて、驚きよりも何かの冗談じゃないかと思うことの方が先だった。見た目はともかく中身とプレイングに可愛げのないこいつに結婚相手が見つかるなんてな。素直におめでとうとは言えなかった。

「おめでとう！ 相手は誰？ もしかして、前に話してた大学時代の先輩？」

俺とは正反対に、根掘り葉掘り聞き出そうとする晴に、天は軽く

頷く。晴はどこか納得していたようでもう一度おめでとうと祝福していた。そういえば、天は大学時代に彼氏作ってたって話していたような気がする。四、五年前の話だし、掘り下げようとするやつもないから、完全に忘れていたな。

「すごく素敵な人なの。一緒にいると、私のことをすごく大切にしてくれてるっていうのが伝わってくるの」

天がその男の話をしている時はいつもより声のトーンが上がって、ちよつと早口になる。そしてなにより表情が輝いていた。二十四で恋する乙女と言うには年齢が高すぎるが、バンドで練習している時には見せないきらめきを見せるのだ。

「幸せになれるといいね」

晴は改めて祝福を送り、天は少し頬を赤らめる。俺にとつて、天の結婚相手はどっかの誰かという認識だから、正直、あまりピンとこないのだけど。

「それで、ね。その、バンド辞めようと思っつ」

は？ 今なんて言った？ バンド辞める？ おいおい、随分と冗談が達者だな。五年も一緒にやってきて、いきなりそれはないだろう。

「その彼がね、来年度から海外赴任することになって、私もついていくことにしたの」

「まあ、そういうことなら仕方ないよね」

晴、そうじゃない。寂しそうな顔をして簡単に受け入れないでくれ。

「代わりのベーシストはどうすんだよ」

「当てはないから、事務所の人に紹介してもらってほしいな」

「ふざけんな！」

思いのほか大きな声が出てしまつて、咄嗟に口を噤んだ。だけど、この三人じゃなきゃ嫌だ。折角ここまで作り上げてきたんだ。まだまだこれからつて時なのにそんなあつさり言われて、はいそうですか、と納得できるわけがない。

「俺はこの三人でやりたいんだよ」

「ごめん」

そうやって罪悪感からか、小声で謝罪をこぼし、天は店を出た。

「今日は、もう帰らないか？」

居た堪れなくなった晴の提案に応じる形で俺はゆっくりと腰を上げた。こういう時、食券で先払いの店は助かる。活きのいい「ありがとうございました」の声を遮るように音を立てて店の戸を閉じた。帰り際、俺はまだ天がバンドを辞めたいという現実を受け入れられず、愚痴を吐いていた。

「まあ、昭の気持ちの方が分からないわけじゃないけどさ。天もいろいろ考えて出した結論でしょ」

そんなことは分かつてんだ。で、お前はもうどうしたいんだ。

「だけどぎ、続けるにしても解散するにしても、喧嘩別れは嫌だな。ファンも望んでないと思うし」

そう、俺たちには少ないけどファンはいる。熱心に追いかけてくれる人がいるのに、辞めたいだなんて言う天も無神経じゃないかと思ってしまうんだ。

「だから、もう一回ちゃんと話し合おう。バンドなんだから、誰かだけ勝手に走るなんて許されないでしょ？ それに、俺たちはもう子どもじゃない。話し合いで解決できないようじゃバンドも何もないと思う」

こんな時だけドラマーらしいことを言いやがって。晴の言っていることは納得できるし、俺だってそうしたいのはやまやまだけど。

「じゃあ、また」

晴は停めていたバイクのエンジンを入れた。結局、話し合いの予定調整とか任せてしまった。あれだけ啖呵切って天を責めてしまった手前、自分からは言いにくい。こういう時だけは、六つも離れている年長者って感じがする。

「いろいろ考えておいてくれよ。昭がどうしたいかさ。おれもいろいろ考えてみるから」

そう言って晴は颯爽と夜の街に消えた。頭の整理、あんまり得意じゃないけど。自分がどうしたいか。

出会ったのは本当にただの偶然。ギターボーカルを探しているバ

ンドがあるという話をスタジオで聞いて、話してみたら好きなバンドが同じだったから組んだ。何処にでもあるような普通な出会い。最初はただのコピバンで終わるはずだった。

ある時、当時ちよつと名の知れたインディーズバンドに対バンを持ち掛けられて、俺たちは一緒にライブをすることになった。その頃からプロになりたかった俺は、どうせ対バンするならと自分の書いた曲にアドバイスしてほしいと思い、一曲書いてみた。『旅路』という曲だ。何処にでもあるような説教クサイ応援歌だけど、これが観客にも対バン相手のバンドメンバーにも好評だった。

それで気を良くした俺はその勢いで二人を巻き込んでプロになるうと提案した。すると、

「別に構わないよ」

「まあ、やれるところまでね」

と、二人ともはつきりとプロを目指すという意思を固めたわけじゃなかったけど、了承はしてくれた。今思えば、本当は乗り気じゃなかったのかもしれない。当時十六だった俺とは違い、二人とも年齢や状況的に社会に踏み出す一歩手前まで差し掛かっていて、たまた、二人とも社会に踏み出せず、現実逃避のために高校生の戯言を受け入れたのかもしれない。

だけどぎつと今は違う。少なくとも天は大方決心しているのだから。できるならこの三人で続けたい。でもだからといって、二人の

人生を犠牲にしたいと思えるほど傲慢ごうまんになんてなれない。どうやって説得すべきなのだろうか。

結局、俺は答えを出せないまま、再び集まる日を迎えた。ここ数日は考えがまとまらないフラストレーションで、練習して弦を二、三本切るくらいには荒々しいピッキングをしていた。

集合場所のファミレスに着くと、すでに二人は向かい合って席に座っていた。

「座って。本題に入る前に注文だけしちやおうか」

晴が穏便に解決するようこの場をうまく仕切ってくれそうだ。俺は余計なところでいがみ合わないようにそれに応じた。各々無難にセットメニューで済ませ、たいして時間も取らなかった。

「x11」

晴はゆったりと座りなおして俺たちの顔をしっかりと見て話し始めた。

「まずは、二人がどうしたいか。それを聞きたいな」

ファミレスという誰でも気兼ねなくいられる場所なのに、このテーブルだけ変な緊張感があった。他の誰かを寄せ付けない三人だけの空間。練習でも経験しない少し窮屈なこの雰囲気は、多分それぞれが気持ちがぶつかり合っているせいだろう。

「俺は、やっぱりこの三人でやりたい。もうちよつと頑張れば俺たちはメジャーデビューできるかもしれない。折角ここまで来たのに

諦めることなんて俺にはできない」

これが本音だ。俺はプロになりたい。高校を卒業してからフリーター兼バンドマンになった。失うものは何もないし、ただ上だけを向いて生きていける。ギターは始めた時の自分が赤子のように可愛なものに見えてくるくらい成長した。俺一人じゃこんなところまでたどり着けなかった。二人だから、ここまで「The TRIPLE」でやってこられたんだ。そして、まだ俺たちは旅の途中。目的地はまだ先にあるはずだから、このバンドを終わらせる選択肢だけは採りたくないんだ。

「気持ちには、分かるよ。プロになりたいってずっと言い続けてきたもんね。でも、私にだって望みはあるの。だからやっぱり続けられない」

これじゃ平行線だ。俺も天もよく似ているのだろう。叶えたい望みがあつてそのための決断を周りに認めてもらいたい。だが、俺と天の間には明らかな差がある。天の場合は結婚、ひいてはバンドの脱退の決断をすれば確実に望みは叶うかな。一方の俺は？ この三人でいつまでも続けたところでプロになれるかどうかは実際には分からない。

天がその二つを天秤にかけて、選んだ結果がこれだ。結局のところ、永遠の砂漠の中に自分一人飛び込むなら何も文句はないだろうけど、バンドメンバー全員がそう思えるとは限らない。

「ずっと黙ってるけど、晴はどうしたいの？」

天は晴の方へ視線を動かしてそう聞いた。正直な話、晴次第なところはあつた。俺たち二人では同じ道を堂々巡りするだけだ。どこかで折り合いをつけて妥協点を作らなきゃいけない。それは晴にしかなれないことだ。

「正直、潮時かなって思ってる。もう二十七だよ。いつまでも夢ばかり追ってられないよ。現に国家資格の勉強をしているわけだし」

晴は晴で別のゴールがあつた。少なくとも、バンドを続けた先に旅の果てがあるなんて思っていないのは事実だろう。そうでなければ二十七になつたバンドマンが、将来のために勉強なんてするわけがない。

「でも、息抜きは必要だろう？」

「そりゃね。でも、息抜き程度の半端者なんて、昭の思い描く音楽にはいらんじやないの？」

それはそうだけど。晴は半端者なんかじゃない。自分をそうやって否定する姿なんて認めたくなかつた。

「そうやって自分の限界を決めんよ。結局、二人はなんだかんだ理由つけて続けたくないだけなんだろう？」

「昭こそ、おれの限界を勝手に過信しないでくれないか？」

晴の目にはいつものような優しさはなく、強気で少し怒っているようにも泣きそうにも見えた。こんな目は正直見たことがない。晴

は滅多なことでもない限り怒ったりしないから。

「ああ。……二人の思いはよく分かつた」

解散。これが二人とも悩んだ末に出した答えだ。それがよく分かつただけよかつたんじゃないか？ そう言い聞かせたかつた。

注文していたメニューがそれぞれ机に置かれ、最後に伝票を置いて店員が去つた。目の前に置かれたスバゲッテイ。俺は呑気に食べる気にはなれなかつた。飢えているのは空腹だからじゃない。ただ、このメンバーで音楽をやりたいという欲求からだ。

「俺たち、これでいいのか」

「どういふこと？」

晴は食事の手を止めないままそう聞いた。

「辞めるのを止められないし、止めても変わる気はないんだろ？」

いいよ、それで。でも、このまま終わったらバンドとしては中途半端にもほどがある。だからせめて、このバンドでできることをしたい」

「具体的には？」

「もう一回ライブをやりたい」

スバゲッテイで腹は満たされても、俺はそれだけじゃ満たされねえ。俺がこの数日間考えていたのは、このプラスチックシヨンを爆発させる場所だつた。それが俺がバンドに固執している理由だと感じた。

正直ロックンローラーに将来とか柄じゃない。天の想う女の幸せも、晴が欲しがる安定も俺にはピンとこない代物だ。でも、それが幸せだって思う人を俺にはどうすることもできない。そんなどうしようもない感情は吐き出さなきゃやってられない。

「そうだな。やろう、ラストライブ。辞めるにしても音楽にけじめはつけておきたい」

晴は真剣な口ぶりでそう言った。喧嘩別れとかそういういざこざで辞めるのは嫌だ。ラーメン屋の帰りにも言ってたからな。

「天はどうする？」

天は音を立ててフォークを置く。そして小さくため息を一つしてこう言った。

「しょうがない。これが最後だからね」

決まりだ。俺たちはもう一度だけライブをする。それで俺たちは終わりにする。妥協なのか、決断なのか。そんなことはどうでもいい。漠然とした未来のことより俺はすぐ起こるこれからを見ていたい。今はそんな気持ちだった。

「じゃあ、曲を決めよう」

「それよりもスケジュールしろ」

「みんないつでも空いてんだろ？」

「暇人扱いしないで。昭と違って私は忙しいから」

音楽の話になれば、俺たちはいいつも通りのノリで話を進めた。話

に夢中になっていたら、注文していたスパゲッティは冷めかけていた。それに気づいて爆速で食う。それを見て、二人に呆れた顔をされるのもいつもの光景だ。ああ、俺たちはこれでいい。離れた場所でも、会えなくても、俺たちはこれでいいんだ。

それからの二ヶ月は密度の高い日々だった。覚悟を決めたのか、全員練習に身が入っていて音もきちんとあっていた。集大成といえど聞こえはいいが、そんなんじゃない。俺たちは三人でできる残りの時間を無駄にしたくないだけだ。特に俺以外の二人はこれで音楽を辞める。気合の入りようはこれまでとは比べ物にならない。フィードバックで取りがちな俺のリズム感覚を二人が指摘したり、タイミングを合わせるところを入念に繰り返し練習する。俺は喉を傷めないように歌い方にも気を遣ってる。練習の時からなんとなく感じていたのは、これが自分たちのできる最高のパフォーマンスなんじゃないかなってことだった。

本番十分前。リハを終えて狭い控室の中で俺たちは向かい合って座っていた。

「人來てるかな？」

天がステージの扉に目をやって、あわよくば覗けないかと様子を

窺^{うかが}っていた。晴はそわそわした天を少し面白がっているような笑みを浮かべ、こう言った。

「リハの時から人いたじゃん。それに、知り合いとかにも声かけて、おまけに、インディーズの事務所の人も宣伝してくれたし」

「事務所の人とかいろいろとお世話になったよね」

天が回想に耽^{ふけ}るように天井を見つめながらそう言った。

「俺はまだお世話になるつもりだから」

「それもそうか」

最後の本番前とは思えないほど、いつもと変わらないやり取りに安心感を覚える。こんな風にずっと過^あこしていたんだけど今更の話だ。

最後に軽く歌詞の確認のためにスマホを見る。歌詞はずっと俺が書いてきた。正直ノリとか勢いとかが重視だからあんまりいいものじゃないのかもしれないけど、このバンドにはよく似合っていると思う。自画自賛だな。

「さあ、時間だよ」

天に言われて俺たちは立ち上がり、三人で円陣を組む。こんなこともやっていることだって最後だ。二人と目を合わせる。準備万端で澄みきった目だ。

「行くぞ!」「ウイー!」

いつもはだらしなく「ウイ〜……」くらいなのに、しゃきつとし

てると本当に最後なんだと感じる。そういうところからも確かに気合が伝わってきた。

そして幕が上がる。立ち籠^こめたスモークの中、俺たちはステージの上に立ち上がった。

観客から起こる歓声と拍手。今日はいつもよりずっと多い。ステージの上からよく見える。ライブハウスの奥まで人がいる。ここにいるみんなが俺たちの曲を待っているんだ。

ギターを構えて、ドラムのフィルインを待つ。入場用のSEが鳴りやんだ。

今だ!

タイミングばっちり。最初の一音目が鳴る。

「お前ら○#※△#×◇〜〜〜!」

ああ、テンションとギターのゲインの上げすぎで何言ってるか自分でも分かんねえ。でもすげー盛り上がってる。ボルテージは十分だ。大事なのは俺が何を伝えるかじゃない。目の前にいる観客以上の魂が歌って、ギターをかき鳴らすだけだ。

そして、かき鳴らすのにぴったりの四曲を詰め込んできた。BPM百八十越えのパンクロックラッシュ。一曲目から観客も俺たちも飛ばしていく。喉の奥から内臓が飛び出るように声を放てば、観客はもつとと言わんばかりにモツッシュでフロアをぐちゃぐちゃにする。ああ、ライブはこうでなくちゃな。

四曲終えたところで、軽く水を飲みながら二人の顔を見る。二人ともいい笑顔をしていた。ただ純粹に楽しいってだけの理由でできる笑顔ほどいいものはないと思う。普段可愛げのない天も今日は肌の色つやがよくて可愛く見えるし、晴はほんのちよつとだけ汗も滴るイケメンに見える。

再びマイクの前に立ち、「どうもありがとう」と叫ぶと、拍手と歓声上がる。さて、MCなのだが、これが全く考えていない。いや、考えてきたんだけど頭の中から消えているというやつだ。まあ、いつものことだ。

とりあえず次の曲が「タピオカとラーメンと僕と」っていうこれまたパンクの勢いだけに任せてすっごい適当に歌詞を書いた曲だからいちいち紹介いらねえな。メンバー紹介は後でするから今話すことも何もねえや。

「えーっと、話すこと忘れたから次の曲行きます！ 『タピオカとラーメンと僕と』!!」

指がフレットの間を行ったり来たりして、カットインを交えたフレーズで、曲が始まってしまえばこっちのもの。アップテンポの曲をやつていれば観客はノッてくれる。それは単純に俺以外の二人がすごく安定したテンポをキープしてくれているからだ、歌っているとしても感じる部分が多い。俺がこの三人がよかつたって思えるのはやつぱりこういうところなんだよな。

あつという間に前半が終わった。途中でミディアムテンポの曲を何曲か挟んだが、ぶっ続けで歌い続けるとやつぱり暑い。汗が止まらないしライトも照っている。今日はラストライブだから観客も激しさが段違いだ。会場全体がむさくるしい熱気で覆われていた。

「改めて、どうもありがとう」

再び拍手が起る。やつと一息つけるMCだ。今回はちゃんと覚えてるぞ。

「今日は、俺たち『The TRIPLE』のラストライブ。こんなに多くの人が集まってくれて本当に嬉しい」

見渡せば拍手をしてくれる観客が二百人くらい。インディーズバンドのライブではなかなか見られない満席だ。やつぱり俺たちはちゃんと実績を重ねていたんだと実感した。

「じゃあ、メンバー紹介から。まず、ドラム！ 晴！」

晴がシンバルを数回鳴らした後、立ち上がってお辞儀をした。

「ベース！ 天！」

天はスラップの弦を弾く音を含んだリフで挨拶。観客に手を振ると、下世話な声で「てんちゃくん」と聞こえてきた。まあ、なんだかんだでファンは天に集中している節があるのは事実だしな。

「そして、ギターボーカル、昭です！」

拍手が誰より大きいのはボーカルの特権だろう。こうやつて拍手されることもこれからはないのかもしれないな。

「さて、今日はラストライブだし、俺以外の二人は、今日を以て、音楽を辞めることになるから。今日は俺たちのことをいろいろと知ってほしいと思う」

音楽をやっている人間なら多かれ少なかれ持っていることがあるだろう。自分のことを知ってほしいという欲求。特にオリジナル曲をやるってなるとなおのことだ。

「このバンドは、最初はただのコピバンドだったけど、いつしかオリジナル曲をやるようになって、バンド名どうする？ ってなった。最初は三人だし『トリプルなんちゃら』みたいな感じでやっていこうと思ってたんだけど、晴がいいこと言ってくれたんだよ」

俺は晴に話を振った。最後なんだから普段しゃべらない二人にも少しくらいは話してほしかったから。

「いや、なんか、『Triple』って英単語の中には、『trip』っていう単語が入ってて、なんか自由な旅みたいなのに、好き勝手やれるバンドにしたいなあって言ったら、二人とも『それいいじゃん』ってなって。本当に好き放題させてもらいました」

「これ聞いて、晴って頭いいんだなって思った」

「いや、頭よかったら大卒でバンドマンなんてやってないよ」

おい、それは言わないお約束だ。そしてボーカルより笑を取るのはやめろ。とは思ったが、観客がウケていればそれでよしか。

「そう、晴だけ大卒なんです。俺は高卒だし、天は……」

「大学中退」

自分のことは自分で言ってもらった。もともと天と晴は大学の先輩後輩だったらしい。しかし天が中退し、大学の軽音サークルにいられなくなつたところに晴のバンド募集を見たのだという。しかし、大学にいた二年の間に、彼氏を作って、そのままゴールインを果たしたわけだからたいしたものだと思う。

「正直大学行かなきゃよかったって思ってる」

「でも、大学行ってなかったらさ？」

晴が冷やかすように左薬指をさすると、俺も便乗して「そういえばそうじゃん」と、茶化す。天は照れ笑いして「まあね」と呟く。

観客もいい祝福のムードで茶化しに来て、中には「おめでとう」と叫ぶ声もあった。天は誰の方も見ないように視線を上に向けていた。解散ライブのメンバーのコメント欄で入籍を発表した効果は十分にあつたようだ。

「ちなみに今日来てる？」

晴がさらに茶化しにかかる、開き直つたのか、旦那のいる方を指さした。指をさされた辺りからより一層祝福ムードが漂い、解散ライブって何だっけって雰囲気になつているのをにやにやしながらかめた。

「私のことはいいいから、次の曲行こ」

「そうだね」

MCもあんまり長々するのもよくない。俺たちは大御所ソロシンガーじゃないんだから。とはいえ、ここからは少しゆつたりした曲が続く。ずっとアップテンポだと観客もドラムのおっさんも疲れるし。あんまり柄じゃないけど勢いより言葉に任せる歌を披露した。

作詞作曲は基本的に俺がやっている。とはいえ、アレンジは殆ど各パートに任せてるから、俺はメロディとコードと歌詞を書いて終わり。特にこのミディアムテンポの三曲は歌詞に苦労したなあ。

愛とか恋とかあんまり興味ないからラブソングは書けない。彼女がいたことは何回かあったけど、何もなまますぐに別れた。人様に誇れるような人生は送ってこなかったから、今じゃ説教めいた応援歌も書けない。そんな時にいろんなアイデアを出してくれたのが二人だ。何にもない俺にいろんな音楽を作れるようにしてくれたのは紛れもなくこの二人なんだ。

ありがとう。今まで忘れていたけど、歌っていたら作った時のことを思い出していた。

いよいよライブも終盤だ。もう一回MCを挟まなきゃいけない。正直得意じゃないし、かつこいいことなんてこれっぽっちも言えないけど、ファンには伝えておかなきゃいけないこともあるから。そんな風に思っただけ。

「今日は、本当にありがとう」
哀愁のあるアルペジオにのせながら俺は続けた。

「さっきも言ったけど、今日は俺たち三人が同じステージに立てる最後の日です。正直、すごく寂しい。みんなもそうなのかな」

小さな拍手がぽつぽつと。中には雷のように「ありがとう」と叫んでくれる人もいた。

「俺たちは、間違っても喧嘩別れなんかじゃないくて、まあ、敢えて言うなら、人生の方向性の違いかな」

俺たちはもう子どもじゃない。一人ひとりが、自分の信じる幸せのために生き方を自由に決められる。「The TRIPLE」というバンド名にはそんな風に旅のように自由に生きていく俺たちの願いが形になっていた。それは今日来てくれた人にも分かかってほしい。

「誰だって自由に生きていい。今はそんな時代。俺たちは、そんな自由を尊重して解散の決断をしました」

と、カッコつけてるけど、そんなこともなくて。ただ、折れただけなんだ。二人の決断の重さに。自分の夢を二人に背負わせるような真似ができなかった自分の弱さに。それは言葉にじみ出てきた。

「ホントは、まだ、続けたい。この、三人で、もっと……」
人前で目から汗を流すのはいつ以来だろうか。

覚えているのは、初めてこの三人でライブをやった後だったな。数人、しかも身内しか来なかった最初のライブ。あの時は自信過剰で、自分なら何でもできると本気で思っていた。高校生ってのもあったらうけど、あの頃は粋がっていたんだと思う。

途中で弦が切れて、喉がガラガラで、歌詞は飛ばし、コードは間違えまくる。今でも思い出したくない、とても人様に見せられるようなもんじゃない演奏をした後は、塩味のラーメンの中にしょっぱい涙を垂らして丸ごと飲み込んだなあ。その時に二人は励ましてくれたのと、俺が本気で音楽をしたんだっていうことを分かって。頑張れの声はボーカルには堪^{こた}える。それは優しきさんだから、続けろって言われてるようなもんだから。

「でも、俺たちは、それぞれの道で、生きていくって決めた。だから、みんなにもそんな風に、自分で決めて、その道を、自由に、進んでほしい。次の曲は、バンド結成時からやってきた、俺たちの象徴みたいな曲です。『旅路』」

一呼吸置いて、俺は一人だけで歌い出した。

誰もが それぞれの道を

歩む途中で 出会った仲間と

旅して ここまでこれたこと

誇りにして進め この道の上

俺のロングトーンを鼓舞するようにシンバルの連打が、ベースのピッキングが聞こえる。俺は天井へ吠えるようにシャウトを放ち、ここにいる全員がそれに応えてくれる。こうやって一体感が生まれ

ていく感じ。何度も経験しているはずなのに、今日は一段と清々しい。

フォーカウントが鳴ったら音楽が始まる。バンドの曲を聞いたことがあるやつなら誰もが知ってる常識。俺たちはもう止まらない。涙は汗と同化して、震えそうな声はビブラートに変わる。一番汚くて、一番自分らしい。なのに楽器がそれを支えてくれて、フアンは拳を突き上げる。この瞬間はみんなを見てるだけで、何も考えなくても幸せでいられる。ああ、音楽っていいなあ。

全十五曲、今日のために準備してきた全部を出した。俺たちは三人一列に並び、手をつないで礼をした。俺が生きてきた中で一番大きな拍手をもらった。それは今日の祝福か、これからのエールか。俺たちはステージを後にした。

三人とも満足感と高揚感に満ち溢れて控室に戻ってきた。天から「はあく、楽しかった〜」と漏れ出た時は、やっぱりやってよかったと思つた。

悔いがないといえは嘘になるけど、これでよかったのかもしれないと今は思える。

「まだ終わじゃないぞ」

晴がステージの方を指さす。そんなことしなくても分かるよ。さっきの拍手がアンコールの手拍子に変わっていることくらいな。

「そうだね、行こうか」

天も腕を伸ばして扉の前へ向かう。俺はその前にどうしても伝えておきたいことがあった。

「あのだ」

二人は立ち止まり、こちらを向いた。早くステージに立ちたそうに手を動かしていても、これだけは。

「組んでくれて、ホントにありがとう」

すると、二人は突然笑い出した。おいおい、本気なんだけどな。

「それはこっちのセリフだ」

「私も、同じ気持ちだよ」

俺たちはそれぞれ違う道を進む。でも、今この瞬間だけは同じ場所を向いていると確信している。

「ほら、ファン待たせてるよ」

「よし、行こうぜ」

俺たちはステージへ向かって扉を開けた。